

平成29年度大阪府立八尾支援学校 第3回学校協議会報告

平成30年2月20日

□日 時 平成30年2月20日(火) 午前10時～12時

□場 所 大阪府立八尾支援学校 校長室

- テーマ
- ・平成29年度学校教育自己診断結果について
 - ・平成29年度学校評価報告(案)について
 - ・平成30年度学校経営計画及び自己評価(案)について
 - ・高等部生徒指導について
 - ・第3回 授業アンケートについて
 - ・居住地校交流について
 - ・学校運営協議会について

□学校協議会委員

岡崎 裕子	(大阪大谷大学 教育学部 教授)
奥野 美和子	(東大阪子ども家庭センター 課長補佐)
御前 敬	(八尾市障がい福祉課 課長)
唐渡 清美	(東大阪市療育センター 第一はばたき園 園長)
竹井 雅代	(本校 PTA 会長)
山崎 高義	(東大阪市障害者就業・生活支援センター 所長)

□学校協議会事務局

岡本 泰宜	(教頭・小/高)	山田 美也子	(教頭・中)
山崎 静一	(事務長)	荒木 智恵子	(首席)
井川 忠都	(首席)	横山 眞二	(首席)
山本 耕平	(首席)	松村 由美	(部主事・小)
長谷川 次郎	(部主事・中)	荒木 聖	(部主事・高)

□協議会 内容

1. 学校長あいさつ

校長：先週までにすべての学部でマラソン大会が無事に終了した。体調に気をつけながら目標を持って一生懸命走る子どもたちの姿が印象的であった。本日は今年度の取り組みおよび次年度に向けた話をしていく。

2. 学校協議会議事録（P. 3～9）

教頭：前回の協議会の議事録をまとめているのでご確認いただきたい。

3. 平成 29 年度学校教育自己診断（P. 10～19）

首席：今年度も多くの保護者にご協力いただくことができた。生徒向けのアンケートは高等部全生徒が対象となっている。生徒もしくは保護者に回答をお願いしている。

・生徒向けの項目では、（1）（10）（11）の学校生活に関する設問については昨年度より数値が上昇している。学校生活を楽しめていることが読み取れるのではないかと考えている。（8）のいじめに関する項目では、肯定が53%だが、否定は2%であった。答えにくい設問だったのかもしれない。（9）の進路に関する設問に対しては肯定が55%であった。進路指導は計画的に実施しているが、今後はさらに生徒にとってよりわかりやすいものにしていきたい。

・保護者向けの項目では、すべての項目について達成基準に達した。（12）の人権尊重に関する取り組みについては今後も継続して取り組んでいく。（15）のキャリア教育に関する設問については、保護者の間に「キャリア教育」の内容が浸透してきたのではないかと考えている。（25）および（26）の施設整備については、校内の清掃に力を入れて取り組んできた成果が出ている、と考えている。

・教職員向けの項目では、（30）（32）（40）（45）の設問以外は達成基準を満たしている。しかし、労働衛生環境、施設整備などまだまだ課題は多い。施設面については、次年度以降に大規模改修が実施される。ICT機器については、新規で購入しているが、それを使用できる児童生徒数が増えており、使用頻度が上がってきているという現状がある。今後とも改善を図る必要がある。（29）の初任者の育成については、日々の細かな業務について均質に伝えていく必要がある。

・保護者からいただいた記述回答の内容については、職員会議を通じて全教職員に周知している。改善点については各学年、分掌などで検討してもらっている。

・全体を通しておおむね基準に達することができた。今後は肯定的な回答が70パーセントの項目について重点的に改善を図っていく。施設整備については、次年度以降の大規模改修で子どもたちが安心して学べるように改善していきたい。また、50周年記念事業で購入したのも大切に使用していきたい。

(質疑応答・ご意見)

Q：卒業後の進路について、生徒向けのアンケートでは数値が低かったが、生徒にとってわかりやすい進路学習に対する具体的なアイデアはあるか。福祉の制度はめまぐるしく変わっている。学校だけでなく、福祉も十分に活用していただき、福祉と学校とが連携してつながっていったらと思う。(委員F)

A：生徒向けの設問(2)と(9)については生徒への聞き方を検討していく必要がある。(准校長)

A：「進路」という言葉が漠然としているので、子どもにとってわかりやすい設問にしていきたい。(部主事)

A：生徒向けの設問(9)については「進路学習」という形で問うようにしていきたい。(2)については、この設問を通じて何を測りたいのかを明らかにしていく必要がある。(准校長)

ご意見：高等部卒業後の進路は企業就労 or 福祉就労だけでなく、様々な道がある。生徒だけでなく、保護者に対しても情報提供していったら。(委員F)

ご意見：キャリア教育をどう捉えていくか、ということと設問自体の見直しが必要である。設問(5)についても再考していく必要がある。(委員A)

Q：配付資料P17の記述回答に書かれている「興味のあることや趣味の交流があればよいと思う」とあるが、これはどういう趣旨のご意見なのか。(委員D)

A：友だち作りのきっかけとして、学校生活のなかで趣味に関する話ができる場面があれば、という意味合いで書かれたご意見であった。(首席)

ご意見：卒業後の余暇のことを考えると、こうした視点も大事であると思われる(委員D)

Q：PTAの進路に関する勉強会の現状はどうなっているのか(委員F)

A：今年度は「年金について」というテーマで勉強会を開催した。ただ、年一回の開催なので、少ないと感じられたのかもしれない。(委員E)

ご意見：進路について、生の情報を得る機会は高等部3年生に限らず、もっと早い段階からあってもいいと思う(委員F)

Q：配付資料 P.12「先生は困っている時に助けてくれるか」という設問についてであるが、生徒にとって教員が安心できる存在であるかどうかを聞くために、「先生は困った時に助けてくれる存在だと思いますか」という聞き方にするのもいいのでは。(委員B)

A：友だち同士で相談し合えるのも勿論だが、保護者や教員など、身近な大人が相談できる存在になっていかなければならない。(校長)

4. 平成 29 年度学校評価報告（案）について

（校長P. 20～22 准校長P. 23～25）

校長：今回は達成状況について申し上げます。配付資料P.22の右側の自己評価の箇所をご覧ください。

・「1 支援学校における教育力の向上、組織としての専門性向上」の（1）①個別の教育支援計画についての項目について、まだまだ課題はあるものの、保護者と課題を共有することができた。合理的配慮に関するアンケートは教員向けに実施することを通じて児童生徒の優先課題を明確にした。②小中学部の教育課程表については、道徳が教科化されるということで一部改訂した。（2）①構造化については、自己診断の結果は向上している。②のICT機器活用については、施設整備に課題がある中で教職員は努力しているという結果の現れであると捉えている。校内イントラネットを活用した教材のデータベース化はまだ進んではいない。ただ、これについては、著作権の問題もあり、教材をデータベース化するにあたっては慎重に行っていく必要がある。（3）①の初任の育成については、目標に達することができていない。（4）のミドルアップダウン型の学校組織マネジメントについては、早くからミドルリーダーになっていく意欲を高めていけるような取り組みを大分進めることができていると感じている。

・「2 キャリア教育・進路指導の充実」については、ライフスキルに関するアンケートを昨年度に実施した。今年度はチェックリストを作成し、身に付ける力を具体化した。キャリア教育に関する取り組みについては保護者から肯定的な評価をいただいている。今後はキャリア教育をどう具現化していくのか、というステージで取り組んでいく。

・「3 センターの機能の充実・発揮と開かれた学校の推進」については、今年度の校長マネジメント予算を活用し、パンフレットを作成した。他にもメールや電話相談システムを構築した。（1）②の中河内地域への研修・相談の数は昨年度より非常に増えている。拠点校型の相談会なども実施しているところである。その一方で高等学校との連携についてはニーズが少なかったこともあり、相談の回数は少なかった。

・「4 安全・安心な学校づくりの推進」について、（1）①テーマごとの研修ということで、職員会議の前に、教育センターで研修を受けた教員による伝達研修を行った。教職員の間でも好評であった。そのほか人権文化発表交流会などへの参加などの取り組みも行っている。大規模災害を想定した実証型の訓練も予定通り実施した。今後も訓練のための訓練にならないよう、さらに力を入れて取り組んでいく。（3）校舎は年数がたっているものの、校内の清掃は行き届いているという評価をいただいている。今後も学校を大切に使うという気持ちを持ってもらえるようにしていきたい。

准校長：「1 支援学校における教育力の向上、組織としての専門性向上」に記載している個別の指導計画については今年度力を入れたところ。個別の指導計画は、教員が子どもをどのように見ているのかがよくわかる。教員による生徒の見立てと支援の方策について、昨年度は8割以上目標の見直しを教員にお願いしたが、今年度は30.7%であった。特に3学期については修正率は15.7%になっており、教員の考えと准校長の考えの整合性が取れてきたと感じる。保護者からの肯定的なご意見も増えている。「1 支援学校における教育力の向上、組織としての専門性向上」は教員の資質向上に向けて学校組織としての取り組んでいくことが重要であり、高等部として特に力を入れて取り組んだ。

・「2 キャリア教育・進路指導の充実」では、これまでになかった1年生のフロンティアコースでの校外実習を実現できた。反省点としては、ジョブマッチングがうまくできずに、就労に結びつかないケースがあったこと。今後は高等部としての進路指導について考えていきたい。学校教育自己診断の生徒向けの項目は2年連続で肯定的評価が50%台であった。

・「3 センターの機能の充実と開かれた学校の推進」については、全校的にはリーディングスタッフが対応しているが、高等部でいうと高等学校との連携になる。今年度は昨年度にくらべニーズが少なかった。来年度からは高等学校でも通級が始まるので、新たにニーズが増えるかもしれない。ホームページのアクセス数については昨年度から大幅に伸びた。これは保護者だけでなくそれ以外の人からのアクセスも増えたと考えている。

・「4 安全・安心な学校づくりの推進」では、八尾の危機管理室の方と連携を始めている。先日の地震避難訓練の際に本校にお越しいただき、お話ししていただいた。今後も地域とのつながりとともに防災の取り組みを進めていきたい。

（質疑応答・ご意見）

Q：目標についてはおおむね達成と考えてよろしいのか。（委員A）

A：そう考えている。（准校長）

Q：高等部では個別の指導計画の目標設定内容の修正する必要性がなくなっている。それぞれ教員が計画的に目標設定できるようになったということか。（委員A）

A：そう捉えている。（准校長）

ご意見：子どもにあった目標を設定していると感じる。もし可能であれば、現在は評価を学期ごとに行っているが、もう少しスモールステップで細かく見ていただけたら。たとえば明日にできるような目標を立てていただき、それができたら次の目標というように細かくステップアップできるようなやり方もいいのではないか。1学期というと長い期間になり、高い目標設定をしてしまうと、実現できないこともある。少しずつステップアップできる目標でもいいのでは。また、現在立てている目標についても、もし学期途中で達成できれば目標を新たに修正してもいいのではないか。（委員E）

Q：高等学校からの支援のニーズとは具体的にはどのようなものがあるのか。（委員F）

A：生徒への個別の支援の方法であったり、生徒向けの出前授業であったり、個別の教育支

援計画の目標設定について、あるいは高等学校の校長から個別に相談を受けることもあった。
(准校長)

A：高等学校は困っている先生はいらっしゃると思うが、大阪府にはサポート校が4校ある。この地域は松原高校が担当しており、そちらに相談する流れもあると考えられる。(首席)

A：進路に関する情報については高等学校の校長に好評であった。(准校長)

ご意見：サポート校への相談の流れができることはいいことだと思う。今後も支援学校だけでなく、サポート校ともうまく分担しながら地域支援を進めていけたらいいのではないかと。
(委員A)

A：センター的機能の話でいうと、究極の目標は各市の支援教育力が上がっていくこと。次年度は高等学校で通級指導が始まることで、高等学校でも今後さらに支援教育力が上がっていくことも考えられる(校長)

5. H30年度学校経営計画及び自己評価(案)について

(校長P. 26~27 准校長P. 28~29)

校長：配付資料のP. 26 をご覧いただきたい。めざす学校像および中期的目標についてはこれまでのものを踏襲している。各項目について数値目標を掲げている。効果測定については学校教育自己診断を指標としている。具体的な数値は計画案に書いている通りである。昨年度から変更したところを中心に述べていく。

・「1 支援学校における教育力の向上、組織としての専門性向上」では、(1) ①では自立活動を明記した。支援学校では大切な領域であり、さらに推進していきたい。また②では道徳教育の計画的な実施を書いている。

・「2 自立・自己実現、社会参加に向けたキャリア教育・進路指導の充実」では(1) ②のライフスキルと自立活動をうまくリンクさせることが重要である。

・「3 センターの機能の充実・発揮と、開かれた学校の推進」では、メール相談、電話相談のシステムを構築していかなければならない。また、次世代の育成も行っていかなければならない、現在は地域支援に複数の教員が参加することで次世代の育成を行っている。

・「4 安全・安心な学校づくりの推進」では、実証型の訓練を具体化していく。さらに細かな計画、実施、検証が必要であると考えている。(校長)

准校長：高等部の計画についても昨年度と大きくは変わらない。肯定的な意見が多かったものについては数値を維持できるようにする。

・「1 支援学校における教育力の向上、組織としての専門性向上」の(1) ②の「授業は理解しやすい」という学校教育自己診断の生徒向け項目の数値が上がるように頑張っていきたい。

(3) ②初任者の育成についてであるが、今年度から初任者に5年目までの教員をメンターとして指名し、指導案などについて相談できる存在としてペアリングした。初任者にとっては身近に相談できる存在であり、メンターとなった教員も、責任感を持って先輩として取り組んでくれたことはよかったと思う。先生方にも好評であった。全校的に支援教育部が授業見学の機会を設けている。授業の合間に見に行くのは難しい側面もあるが今後も継続していきたい。

・「2 キャリア教育・進路指導の充実」では、2年取り組むなかで企業就労への手ごたえを感じている。実際には職業コース以外の生徒が就労することもあるが、次年度は職業コースの定員を6人という具体的な数字を目標にしている。(3) ③については、自己診断での生徒への聞き方を含め、検討していきたい。

・「3センター的機能の充実と開かれた学校の推進」については大きくは変わっていない。

・「4安全・安心な学校づくりの推進」では、生徒の時間割、連絡先、一時避難場所など、すぐに学校として動けるように防災マニュアルを改善していく。

(質疑応答・ご意見)

Q：校内研修の内容について具体的に教えてもらいたい。(委員D)

A：支援教育部が年間の研修計画を立てている。支援教育に特化した内容や進路指導に関係した研修や保健関係等が網羅されている。日程調整を行い、年間計画を立てている。(准校長)

Q：初任者は校内研修に加えさらに研修があるということか。(委員D)

A：その通りである。(准校長)

A：研修の内容については、初任の先生方のニーズも踏まえながら計画している。今年度は日々の授業作りや、TTの進め方などを取り上げた。(首席)

Q：研修は講義型が中心となっているのか。(委員A)

A：講義型の時もあるが必要に応じてワークの形式を取り入れている。ワークでは先輩の教員にも声をかけて参加してもらったこともある。

Q：授業見学については、ただ見学するだけでなく、「自分ならこうする」などの気づきを含めた授業者と話し合う機会はあるのか。(委員A)

A：授業見学の際には感想シートのようなものを用意しており、授業者に授業見学のお礼を伝えるとともに授業のことについて話し合えるようにしている。

Q：授業見学の回数は何回設定されているのか。(委員A)

A：昨年度は2回設定したが、業務量の調整の観点から今年度は1回にした。ただ、見学の回数が1回では少ないという意見もあるので、回数については今後検討していきたい。(首席)

A：授業週間という形でさまざまなクラスの授業を見学できるようにしているが、児童生徒の安全面にも配慮していく必要がある。中学部、高等部の教員は空き時間があるが小学部の教員は午前中には空き時間がなく、授業の見学については時間の調整が必要である。(校長)

A：小学部では10分でも授業が見学できるよう学部内で調整している。(首席)

6. 高等部生徒指導について（P. 30～31）

部主事：最近の高等学校での頭髪指導の件の関係で、教育庁から生徒指導に関する校則の見直しの通達があった。本校には校則はないが、今回は高等部の生徒指導の内規について報告する。この内規は平成23年度に作成した。校内で問題となる行動が起きた際、学校としてどのように対応するのか、指導の方向性を統一させるために作成した。方針や内容については配付資料に書かれている通りである。指導の内容としては、それぞれの行動に対し「A 口頭注意」「B 別室指導」「C 自宅謹慎」の3つがある。

（質疑応答・ご意見）

Q：今年の1月23日に改訂したのはどの部分か。（委員F）

A：P. 31の暴力行為に対する指導内容について、これまでは指導の内容がCのみであったがBを加えB、Cとした。（部主事）

A：この学校協議会でご意見をいただき、公のものにするように教育庁から指示されている。他にもご意見があればいただきたい。（准校長）

Q：指導のABCに値しないが、いじめについては、事象が起きる前から細かく対応していく必要があるのではないか。（委員D）

A：その都度対応できるよう日々取り組んでいる。（教頭）

Q：学校としてはいじめではないと思っても、本人はいじめられていると知っていることもあるかもしれないので、いじめがあるかもしれないと考えながら対応していく必要がある。（委員D）

Q：対物に関する項目は触法行為である。学校の指導の内容はBの別室指導でいいのか。

A：触法行為については、学校で二重に罰することのないようにしている。あくまで生徒指導の一環として捉えている。（部主事）

A：指導内容のABCは必ずしもランク付けという意味ではないと考える。対人関係については、他の子どもと離す必要がある場合がある。家で指導を受けるのがいいのか、学校で指導を受けるのがいいのか、この場合は学校で指導をする方が望ましいと考えている。（教頭）

A：あくまで行動の改善が目的である。（准校長）

ご意見：その方針についてはよくわかるが、状況に応じて指導の内容を選択するのであれば、Cという選択肢があってもいいのではないか。（委員F）

A：窃盗など、学校管理下以外で起こったことについては刑事罰を受けることになる。その上で学校でどう指導していくのかを検討していかなければならない。（校長）

7. 第3回授業アンケートについて（P. 32～35）

教頭：3 学期の授業アンケートの結果について申し上げます。どの学部でも良い評価をいただいている。授業力も上がってきているのではないかと。3 学期になり、現在の学習環境に慣れ、集中して学習できるようになったことがアンケートの結果として出ていると考えている。中学部および高等部の授業内容への興味関心で「そう思う」の値が若干少ないが、「だいたいそう思う」と合わせると高い率となっている。今後も一層授業力の向上に取り組んでいく。生徒向けアンケートでは、あまり思わないが一つあった。生徒に寄り添うよう授業を工夫していく。保護者からの記述回答については、授業の展開については、もっとこうした方がいいというご意見もあったが、一年を通じて子どもの成長を感じた、とか、一人ひとりの子どもに気を遣っていただいているという肯定的なご意見もあった。

（質疑応答・ご意見）

Q：授業科目については 1、2 学期と異なる教科の授業を設定しているのか。（委員 A）

A：そのように設定している。（教頭）

Q：統計的な観点からいえば、「そう思う」と「大体そう思う」については、同じ YES という肯定的意見として捉えてよいと思う。ただ、フロンティアの生徒からのアンケート結果で「質問や発表がしやすいか」という項目で「そう思う」が少ないのは気になる。質問がしにくかったのか、発表がしにくかったのか。（委員 A）

A：今回のフロンティアコースの生徒向けの授業の内容が実験が中心で、発表の機会がなかった。実際にこの質問に対しては無回答の生徒もあり、答えにくかったのかもしれない。（教頭）

8. 居住地校交流について（P. 36）

首席：ほぼ予定通りの実施となった。1 件体調不良のために中止になったケースがある。昨年度より交流の数は増えている。居住地校交流という取り組みが浸透していきいていると感じる。交流の内容も充実してきている。交流のあり方について、進め方や校内組織のあり方について検討していく必要がある。

（質疑応答・ご意見）

Q：居住地校交流は事例としては少ない事例なのか。（委員 A）

A：最近はどの学校も積極的に取り組んでいる。学校によっては分掌として取り組んでいるところもあるので参考にしていきたい。（首席）

A：次期学習指導要領でも触れられており、推進していく必要がある。しかし、担任が対応するのは難しいこともあり、現状は首席が対応している。今後検討していく必要がある。（校長）

Q：協議会は全国的に開催されているのか。（委員 A）

A：今回本校が参加したのは大阪府で開催されたもの。全国的な協議会も開催されている。(教頭)

Q：学年によって交流に参加している児童生徒の数に偏りがある。一年生が多いが、二年生になっても希望されるのか。(委員F)

A：希望は毎年実施している。一年生は初めてなので一度経験した上で、次年度に再度希望される方もいる。特に中学部の交流では地域の小学校時代の関わりを感じることができて嬉しかった、と保護者からも評判であった。学校教育自己診断で交流の回数が年に一回というのは少ない、というご意見もあるが、現状は一回のみの実施となっている。(首席)

9. 学校運営協議会について (P. 37)

校長：次年度より学校協議会が学校運営協議会となる。主な変更点としては、地域住民のご意見を反映させること、学校計画計画の基本的な方針について承認をしていただく、ということ、そして教職員の任用に関して意見を述べることができる、ということである。委員の任期は2年で最長4年となる。

10. 准校長挨拶

准校長：教育庁より学校経営計画の中に「働き方改革」に関する内容を入れるよう指示があった。どのような形で本校の学校経営計画にこの内容を入れていくかを考えていく。委員の先生方にもご意見をいただけたらと思う。近年は高等支援や専修学校や高等学校など、中学部や中学校の支援学級の進路が多様化している。そのような中で支援学校高等部も、進路指導や授業の進め方については時代の流れや子どもの実態に沿って常に変わっていかなければならない、ということをお教職員に伝えていかなければならないと感じている。歴史のある学校の良い所と新しい所をうまく組み合わせながら教職員と頑張っていきたい。委員の皆様には今後ともよろしくご支援いただきたい。本日はありがとうございました。

11. 閉会 諸連絡